

小林 登「子ども学」賞 創設の喜び

榊原洋一（日本子ども学会 理事長）

小林先生の希求された子どもの幸福が保障される社会の実現に寄与した方を顕彰する、小林登「子ども学」賞が制定されました。小林先生のお考えに深く影響を受け、現在もそのはるか後方から小林先生を仰ぎ見ている私にとって望外の喜びです。

小林登先生の成し遂げられた多くの分野に及ぶご業績は語り尽くせません。日本子ども学会創設も小林先生のお仕事の一つであり、その活動の目的も小林先生が希求されてやまなかった、子どもの幸福が保障された社会の実現であることは皆さんもご存知だと思います。

とはいえ、現在の学会員の皆さんで、実際に小林先生の訶咳に接した方はごくわずかだと思います。この機会を利用して、小林先生がどんな方だったのか、そしてどのような仕事をされた方であったのかお伝えしたいと思います。

小児医療をはるかに超えた視野と関心

小林登先生は小児科医です。小児科医の基本的な仕事は、子どもの病気を治すことです。長らく東京大学小児科学教室の教授と国立小児病院院長を勤められた小林先生は、子どもの病気を治す「小児医療」の最先端におられました。そんな意味で、子どもの病気を治すことにかけてはエキスパート中のエキスパートでした。しかし小林先生は、小児医療の領域を遥かに超えた以下のような幅広い分野への関心を持っておられました。

免疫学、遺伝子、進化論、脳科学、エコロジー、
霊長類学、赤ちゃん学、人間論、母子関係論、障害児、
小児虐待、子どもの文化、子どもの心

小児科以外の様々な領域に強い関心を持たれただけでなく、後に述べるようなそれぞれの領域で深く意義のある仕事をなさっています。こうした幅広い分野への強い好奇心と探究心は、小林登先生に生まれつき備わった資質によるところも大きいと思います。

小林先生が私にお話くださったこんなエピソードがあります。戦争が終わってすぐ、東京大学医学部を

卒業したばかりの若い医師に対して、アメリカでの研修を希望する若手医師の募集がありました。希望者は大勢いたそうなのですが、いざ実際に応募する段になると小林先生を含めてたったの2名しかいなかったそうです。応募しなかった同級生の多くは、しばらく前まで戦争で戦った国に行くことへの勇気がなかったのではないかと思います。

堅苦しいドイツ医学を学んだ小林先生にとって、自由な雰囲気のアメりカでの医学研修は、既存の体制への批判的精神につながったと思います。

アメリカでの臨床研修が終わった小林先生は帰国後しばらくして、今度は臨床小児科学の歴史のあるイギリスの小児病院でさらに臨床の研鑽を深めます。

時代の最先端を透視する鋭い直感と実行力

小林先生のご著書『^{ふういんしんし}風韻怎思』の中に、小林先生がロンドンに留学中の1960年台に、チンパンジーの研究で有名なまだ若いジェーン・グドールさんの本を読み強い関心を持ったというエピソードが紹介されています。日本は現在チンパンジーなどの霊長類研究で世界の最先端を行っていますが、そのずっと前に、一冊の本を読んだことで、チンパンジーの研究の中に、人の子育てについてのヒントがあると直感されたのです。それが正しかったことは、その後の日本の霊長類学が証明しています。

小林先生はここで止まりませんでした。日本に帰国後、国際会議を開く機会が与えられたときに、グドールさんを日本に呼び、日本の医師や研究者にグドールさんとその研究を紹介したのです。医学部の学生だった私も、小児医学の講義ではなく、グドールさんの講義を聞くことのできた幸福な経験をした一人でした。

戦後、粉ミルクが普及し、母乳で子育てをする母親が減ってきたときに、母乳育児の栄養面だけではなく、母子の愛着関係への影響が注目され、その後、母乳栄養の重要性が広く知られるようになりました。小林先生は、その端緒を開いた一人です。

帰国後もロンドンを何度も訪れ、医師仲間とよくパブに出かけた上記の著書にありますが、パブと同様によく出かけたのが書店です。そこで偶然、母乳栄養の重要性を世界中に広めたダナ・ラファエルさんの著書を見つけ、帰国の飛行機の中で夢中になって読み終わったと書かれています。そして、グドールさん同様、ダナさんも日本に招き、母乳栄養の重要性や、産婦さんを心理的に支える専門職であるドーラを日本に紹介しました。出産は母となるための試練で、耐えることが重要といった古い精神主義に一矢を報いたのです。そこには、イギリスでの新しい医学領域である免疫学の研究を通じた母乳栄養についての深い医学的洞察がありました。

学問的関心をそこで止めずに社会実践につなげるといふ小林登先生の姿勢は「使命感」といった外側から規定されるものではなく、自然で内発的なもののように感じられます。

鋭い社会的感性

小林先生の強い関心は、霊長類学や母乳栄養といった新しい考えだけに向けられたものではありません。

国立小児病院院長時代には、難病で亡くなったお子さんの親と一緒に、数多くの難病を持つ子どもと親のための団体（NPO）を立ち上げています。先端医学でもまだ治療法が見つからない難病に悩む子どもと親への温かな共感が感じられます。

白血病や心臓疾患などで長期間入院を余儀なくされた子どもが、病院内でも教育を受けることができるように、国立小児病院内に「院内学級」を作ったのも小林先生でした。さらに、長期入院の子どもの保護者が安価で宿泊できるホテル（マグドナルドハウス）を病院の敷地内に招致したのも、またのちに小児虐待の研究、研修所である「子どもの虹情報研修センター」のセンター長に赴任されたのも、小林先生の病気や障害を持つ子どもに対する社会的な感性の鋭さの証左だと思います。

飛び抜けた国際性と先見性

1980年には、世界中の小児科医が集う国際小児科学会の会長に選出されます。まだ日本の小児科学がアメリカや欧州の小児科学の後塵を拝していた時期に、小林先生は国際舞台で活躍されていたのです。

多くの国際会議で、世界の子どもをめぐる小児医学



国立小児病院を訪れたダイアナ妃をご案内する小林登先生

を超えた様々な課題への深い理解への評価は、例えば臨時教育審議会委員への就任となって結実します。

インターネットの将来性をいち早く理解した小林先生は、世界の子どもの幸福を実現するためにヨーロッパで先行していたネット上の子どもの情報サイトにヒントを受け、日英中の3カ国語のウェブサイトを立ち上げます。ここにも小林先生の鋭い先見性が発揮されています。

70歳を超えられてからも、小林先生の驚異的な行動力は続きます。現行の狭い領域に止まっている専門学会だけでは子どもの問題は解決しないという強い思いのもと、日本赤ちゃん学会、そして日本子ども学会を次々に創設します。子ども学会を立ち上げる前には、長い時間をかけて子どもに関わる多様な分野の研究者を講演者とした研究会を行い、用意周到な準備をされています。そこにご自身のお考えを必ず社会実装してゆくという強い意思を感じます。

多くの人を魅了する人間性

そしてなんとといっても、多くの人を引きつけてやまない、あの優しい笑顔に象徴される小林先生の柔らかく温かい人間性があります。小林先生には強い社会的な実行力を持つ人にしばしば見られる他人への厳しい姿勢がありません。小林先生との50年近いお付き合いのなかで、一度も叱られたことがないのです。また他人を批判する言葉を聞いたことがありません。

ここまで書いてきて小林先生の御業績の半分もご紹介できていませんが、小林登先生という時代を先取りした傑出した指導者の名前を冠した賞を本学会で創設することができたことは、私にとって本当に喜びです。

この賞が、子どもに関わる様々な研究や活動を顕彰する賞として発展し、一人でも多くの子どもに幸せに寄与していくことを祈念しています。